

障害者就労事業における共働の模索

——事業所「すずらん」での役割付与に着目して——

名古屋大学大学院／日本学術振興会 伊藤綾香

1 目的

本報告の目的は、障害者と健常者とが共に働く（＝共働）ことを目指し、そうした場を作る取り組みを行っている NPO 法人「わっぱの会」の事業所「ワークショップすずらん」で、実際にどのような共働が形成されているのかを明らかにすることである。

一般に障害者の就労現場では、労働の理念的側面（自己実現）と経済的側面（生産性）との両立がきわめて困難といわれる（青木 2011）。というのも、理念的側面を重視すると自活可能な収益を望むことが難しくなり、経済的側面を重視すると効率を追求し、作業に支障のある障害者を排除することになるためである。それに対して、本報告が対象とする NPO 法人「わっぱの会」は、製パン業をはじめ様々な事業を展開する際に、障害者と健常者の共働を謳い労働の理念的側面を重視するだけでなく、双方に高水準で同額の賃金を支払い労働の経済的側面の達成もねらっている（伊藤 2011）。新しい労働観のもと展開されているこの取り組みは、職員による利用者の生活・職業訓練や就労支援といった従来の障害者就労施設とも異なる労働のあり方を目指している。本報告では、製パンをおこなう「ワークショップすずらん」の事例を取り上げ、他事業所の事例との比較をしながら、障害者と健常者との共働実践がいかに模索されているのかを明らかにする。

2 方法

本調査では、メンバーへの役割付与に着目し分析を行った。データは、製パン業を営むワークショップ「すずらん」における参与観察および聞き取り調査により収集した。

3 結果

「すずらん」では、通常の事業所とは異なり、障害の有無や程度にかかわらずメンバーが同じ場で作業をしている。そこでは、健常者メンバーが役割決定を担い、実質的に事業活動に参加していないように見える障害者メンバーにも製パン業に関わる役割が付与されている。こうして全員が働く場に組み込まれているのに加えて、業務については健常者メンバーも障害者メンバーも、メンバー全員で一つの仕事をっていると認識している。他事業所では健常者は障害者のサポート役として固定されているが、「すずらん」ではそこが曖昧にされている。例えば、障害者によって障害者の介助がなされている。健常者による障害者の指導・教育といった意図が介在していない点も他事業所とは異なる。このように、「すずらん」では、働くという営みの中、他の事業所では明確な障害者と健常者との役割の分断を曖昧にすることで、共働的な場の形成が模索されていることが明らかとなった。

○参考文献

青木千帆子, 2011, 「障害者の就労場面から見える労働観」 『解放社会学研究』 25: 9-25.

伊藤綾香, 2011, 「障害者運動における当事者概念と労働観の変遷——NPO 法人「わっぱの会」を事例に」 『名古屋大学社会学論集』 32:133-150.